

6) 明治期発行の医籍録に掲載された新潟県内の医師・歯科医師人名

On the Medical Doctor's and Dentist's Lists for Niigata Prefecture in Meiji Era

日本歯科大学新潟歯学部医の博物館 樋口輝雄

Teruo HIGUCHI

わが国では明治17年からそれまでの内務省免許医師と従来開業医(道府県仮免許医師)に対し、統一した医籍編成が行われたが、明治22年には全国の医籍登録者を収録した『日本医籍全』(以下「日本医籍」)が内務省衛生局の編纂により刊行された。以降、明治期に刊行された全国的な医籍録(医師名簿)としては、明治31年の『帝国医籍宝鑑』(以下「宝鑑」)、同42年の『日本杏林要覧』(以下「要覧」)がある。

各書の構成および収録者概数を記すと、『日本医籍』は道府県別に約3万名の住所氏名、巻末に居所不明者約8860名の氏名を列記しており、『宝鑑』は開業医、従来開業医、限地開業医、歯科医に区分して、道府県別に約4万名の住所氏名を掲載している。『宝鑑』での「開業医」とは、明治16年以前の内務省免許医師ならびに、翌17年以降に試験及第、卒業で医籍に登録された医師の謂であろう。また『要覧』では、医籍、歯科医籍、口中医籍、整骨科医籍に区分し、約3万8千名の氏名、免許種別、医籍登録年月、族籍、生年、住所、電話番号が掲載されており、免許種別では、試験(及第)、(奉職)履歴、学士、医学校等と記載され、従来開業医は「○○」、限地開業医は「◎◎」の符号で表記している。「歯科医籍」は、明治17年より「医籍」とは別に編成されたが、同34年の内務省令「医籍薬剤師名簿編成並加除訂正規程」により各市町村の医師・歯科医・薬剤師名簿が調製されることとなり、「医師免許規則」施行(明治17年)前の暫定的な専門科である「口中医」「整骨科」医師については、地方庁免許の「入歯齒抜口中療治者」「接骨営業者」と混同しないようにとの記入上の注意があることから、『要覧』では特に、「口中医医籍」「整骨科医籍」の区分がなされたものと思われる。

また、『医制八十年史』によれば、明治42年時

の全国医師数は37071名、歯科医師数1068名であり、『要覧』には、「医籍」で凡そ3万7千名が掲載されたと推測される。同書の「歯科医籍」に1040名が、「口中医医籍」に26名、「整骨科医籍」には79名が掲載されており、整骨科では、女性と思われる従来開業医6名の名があった。

新潟県の欄に掲載された医師は、『日本医籍』では1329名、『宝鑑』では、開業医464、従来開業医1025、限地開業医7、歯科医1の計1497名、『要覧』では、医籍1165、歯科医籍27、口中医医籍1、整骨科医籍10の計1203名であった。現在、住所地と氏名を基に集計中だが、『日本医籍』に掲載された1329名のうちの約73パーセントが『宝鑑』に、そのまた約45パーセントが『要覧』に掲載されていること、つまり新潟県においては『日本医籍』掲載者の約3分の1が20年後にも医業を継続していたことが確認できた。

免許種別、族籍等を記載した『日本杏林要覧』の資料的価値は非常に高く、個人情報のみでなく、各地での医師の動態を分析するのに有用であろう。同書を資とした先行研究には、橋本鉦市氏の論考(1992年)があるが、『要覧』の記載事項については、他資料とも校合し、補正する必要があるだろう。

演者の集計では、『要覧』に掲載された新潟県下の医師(口中医・整骨科を含む)1176名のうち、免許種別・族籍が掲載されていない者4名があり、1172名を対象とすると、従来開業医は425名、最高齢は、中頸城郡国明村の小池蓮蹊で文政2年(1819)生、明治42年の時点では90歳であった。族籍については、士族143名、平民1028名で、構成比は凡そ12.3対87.7であり、また新潟県以外を本籍とする者96名で全体の8.2パーセントであった。これら資料を基に明治期における新潟県下の医師・歯科医師について報告したい。